

旧神通川河口部と中世打出について

藤田 慎一

1 はじめに

今回の調査ではA区で神通川の旧河道をB-1区では旧神通川によって形成された自然堤防の一部を検出した。本調査の以前から古川知明氏によって打出遺跡の範囲内に存在することが推定されており、今回の調査の結果、これを裏付けることとなった。また近年、中世岩瀬湊調査研究グループによって海底調査などが行われ、この成果によって打出沖が中世の段階では陸地であり、『廻船式目』にみえる岩瀬湊が存在していたと考えられている。本稿では、発掘調査の成果と古川氏の想定した旧神通川を基に自然科学分析の結果および文献資料を踏まえて旧神通川の河口部と中世打出について論じていきたい。

2 文献資料から見た神通川の河口部と中世打出について

中世打出の所在する地は婦負郡万見保に属していたことが、元々打出の地に所在した極性寺の文書などに記述が見られる。万見保の成立年代としては、応永15（1408）年の將軍家御教書に初見が見られることからこの時期前後であろうと考えられる。それ以前については周辺の地名に倉垣の地名があることや打出の地に貴船神社が存在し、射水郡下村加茂に所在する加茂神社に末社として貴船社も勧進されていることから11世紀代には成立していたと思われる下鴨神社領倉垣庄となんらかの関係があったものと思われる。

神通川河口部と中世打出を知る資料としてまず、室町時代の公家冷泉為広が越後に下向した際に書かれた『越後下向日記』が挙げられる。これには、

十四日、自暁雨降、ハウシ津ノ普照寺ヲ立 アラヤ（荒屋） フシ権現ノ御トヒアル社アリ
エビエ（海老江） メウシン（明神） 橋 ネリヤヒ（練合） イハウ アシアラヒ里（足洗）
ウチデ里（打出） シバクサ ヨカタ里（四方） イワセ渡（岩瀬）、大河あり、里カミイ
ワセ ナカエノ木里……………

とあり、打出は富山湾に沿ってつくられた後に浜街道と呼ばれる道に立地する集落であったと思われる。また、この日記が書かれた延徳3（1491）年の段階には、神通川の本流が岩瀬へと移っていたことがわかる。このほかに伝承を記述したものであるが江戸時代に書かれた野崎伝助の『喚起泉達録』があり、越中の古伝承を書き連ねている。その巻十二、天児六郎が夏には、

打出昔三千軒ノ家在テ打出宿ト唱湊ヲ勤テ……………（中略）……………打出村千軒ノ宿ナリト云
シヨリ数度ノ高波ニ居所ヲ破ラレ今時云打出村ハ六度南ヘ逃上リタリト云リ古ト今ト語ラン
トスルニ浩違ハ多カルベシ然ドモ花ガ墓所ヨリ見時ハ又古ヘモ知安キモ云ベキ也

とあり、打出には三千あるいは千軒の住居がある宿場町であり、高波で被害を受け、今では六度南へ移って来ていると伝えられている。こうした記事は伝助の孫、野崎雅明の『肯溝泉達録』にも同様の記述が見える。伝承であるため、真偽ほどはわからないが、中世段階では打出の集落が存在し、高潮などの災害によって集落の位置を変えていたことが考えられる。こうした災害による移転に関するものとしては、現在四方西岩瀬に所在する海禅寺の縁起に、一尺五寸の黄金の釈迦如来像が引き揚げられ、この寺の開基である仏性上人が打出の地に七堂伽藍を建立し、祀ったのが始めといわれている。その後、天徳2（957）年に海岸が崩れ、西岩瀬に移ることが記述にある。また、四方の四方神社の伝承に昔五社宮を鎮守としていたとあり、〔高瀬1964〕これが海

底に残る五社宮の地名に関連するものと思われる。

これらのことから、10世紀以降には確実に波の浸食や高潮などの災害によって富山湾の海岸線が後退し、寺社や集落自体が位置を伝承のように海禅寺のように現在の地へ移ってきたものと思われる。

洪水に関するものについては16世紀以降の資料にしか見られないが、天文13年（1569）天正8年（1580）に大きな神通川の氾濫に見舞われている。17世紀の記述でも4回の大洪水の記述が見え、中世段階においてもかなりの暴れ川であったことがわかる。そのため、川の範囲内での河道や地形の変化、土砂の流出、堆積は著しいものであったと考えられる。

これら文献史料から神通川河口部は高潮あるいは洪水によって集落やその周辺空間の大きな変化が見られる。とくに中世の海岸線がかなり北にあったことは注目すべきものである。富山湾は波による侵食を受けやすく、近世の地図資料と比較してみても現在の海岸線が後退していることがわかる。そして、打出沖に集落の存在を示していると思われるのは『婦負郡志』に、海辺で井戸が見つかり、青磁の小皿が引き揚げられている記事が見える。また、昭和25年に打出で行われた護岸工事の際海岸縁に井戸枠と五輪塔の残欠が出土し、古老の話によると高波の際に、汀線付近で井戸が見られたことを高瀬保氏は紹介している〔高瀬1969〕。

以上のことを考えると中世打出と神通川の河口部は現在の景観とはやや異なっており、中世には港として栄えた放生津と岩瀬湊を結ぶルート上にある集落であり、そこには極性寺や五社宮などの寺社が所在していたことがわかる。また、河口部については10世紀の段階より海岸線の後退が始まり、高潮や洪水といった一時的なものもあいまって、大きく変化しており、中世段階には打出遺跡のそばを流れていた神通川が東へと本流をかえていったものと考えられる。

3 発掘調査の成果と自然科学分析から見た神通川河口部と中世打出について

発掘調査では、神通川河口部分に関してはA地区で旧神通川の河道を検出し、古墳時代前期のものと考えられる川岸を確認した。川の部分からは弥生後期後半から近世にかけての遺物が出土している。B-1地区では自然堤防の部分で掘削し、その堆積土から弥生時代後期後半の甕を2個体検出している。中世打出に関する遺構についてはA地区は井戸4基、B-3地区、C地区は屋敷地を区画したと思われる溝が数条、掘立柱建物が3棟、井戸7基、道路状遺構が検出され、遺物は珠洲焼、土師器、八尾、国産陶器、中国産陶磁器、漆器椀などが出土している。A地区は旧神通川が埋没していく過程で掘り込まれた井戸であり、SE3やSE4は遺物等から16世紀前半頃のものと思われる。B-3地区やC地区は現集落の南に位置しており、中世段階における打出集落を示すものかは断定出来ないが遺物から12世紀後半から13世紀前半を中心した年代が示されている。

また、今回の調査では旧河道内で採取した土壌をパリノサーヴェイに委託して珪藻分析を行った。詳細は本報告書内に記述しているので割愛するが、要約すると、検出された珪藻化石群集は汽水～淡水生種が検出されており、旧河道の上層と下層で珪藻の組成が異なっている。下層では、汽水～淡水性の止水性種が特徴的にみられることから、当時は河口部の潟のような止水域であったと推測される。上層では汽水生種や中～下流性河川指標種群を含む流水性種が多く見つかったことから、氾濫の影響を強く受けて土砂が供給されるようになったと推測される。このことから、A地区で検出された河道は、古墳時代前期頃に流路の中心が他に移ったため河跡湖のよう

な状態になったが、氾濫の影響を受けて、中世頃までには完全に埋没したと分析されている。

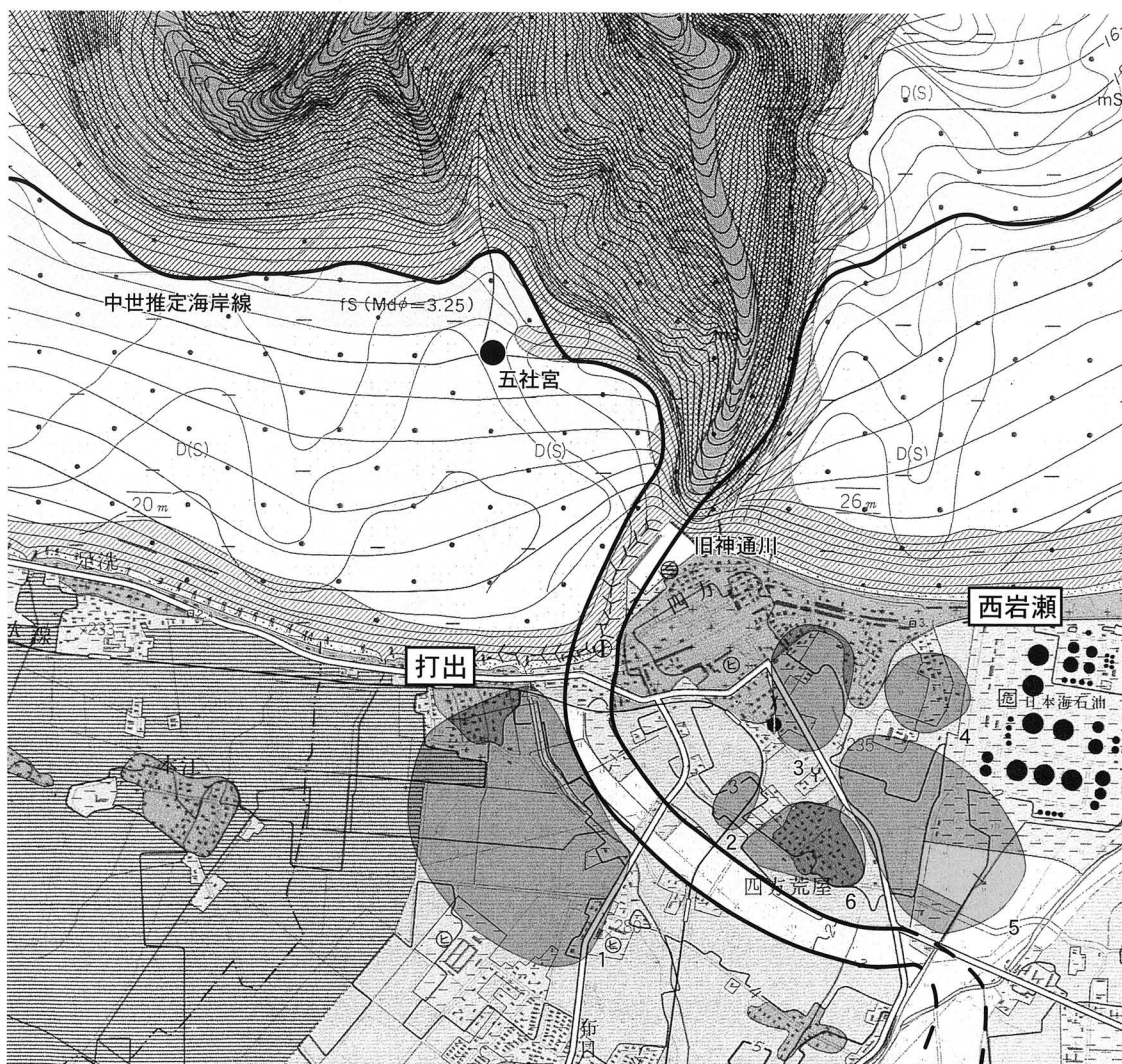
これらを含めて考えると旧神通川の河口部は古墳時代前期までは神通川の本流としての機能を果たしており、その後、河跡湖や河口潟の時期が古代以降続き、氾濫の際には流路として土砂が運び込まれ埋没していったと思われる。A地区から検出された16世紀の井戸とパリノサーヴェイのよる分析とは一致していると考えられる。

4 結語

以上で文献史料と発掘調査から旧神通川河口部と中世打出について考えてみた。中世岩瀬湊研究グループの成果では中世打出については四方沖に比定されている岩瀬湊と旧神通川を挟んで対岸に古伝承の打出宿があったとしている。海底地形や現在海となっている部分からの井戸の発見等もあり、現在、国道415号線より南にしかない現集落が中世にはその北側にも集落の存在をうかがうことが出来るが、まだまだその実証については難しい。打出遺跡と旧神通川との関係については、洪水や富山湾の浸食作用によって景観が変化し、断片的ではあるが、集落の立地などに変化を与えているように考えられる。

参考文献

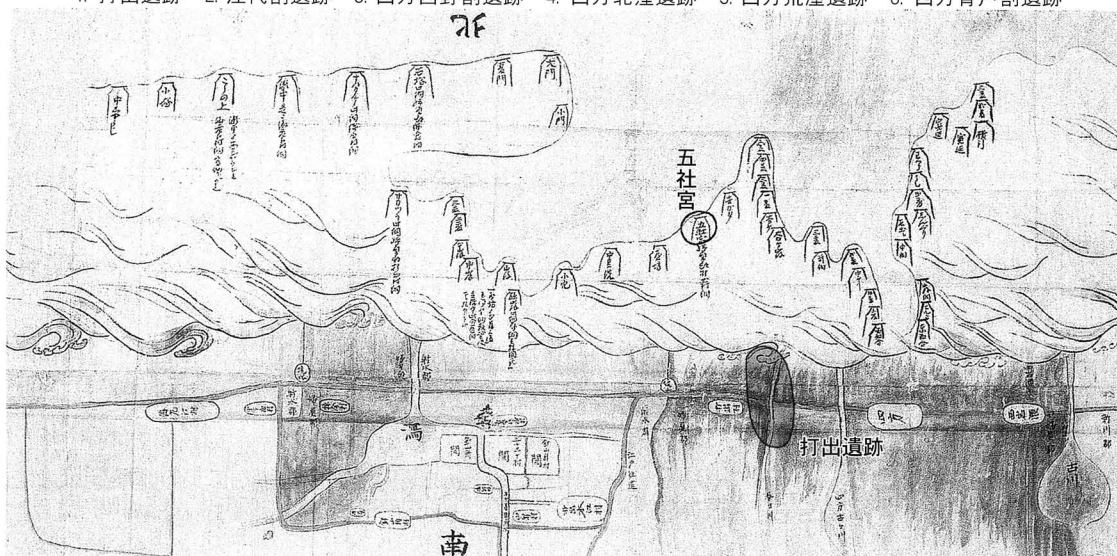
- 婦負郡役所 1909 『婦負郡史』
石井逸太郎 1952 「富山湾海岸地帯の地学的調査」『富山湾海岸浸食調査報告書』
高瀬保 1969 「古文書からみた放生津潟の変遷と射水平野の形成」『放生津潟周辺の地学的研究』
藤井昭二編 1974 『富山湾（富山文庫3）』巧玄出版
藤井昭二ほか 1978 「富山湾西部海岸における海岸浸食」『自然と社会』44
布目久三 1982 『四方郷土史話』
布目久三 1987 『西岩瀬郷土史話』
深井甚三・米原寛 2001 『ふるさと富山歴史館』富山新聞社
広瀬誠 2003 『神通川と呉羽丘陵』桂書房
富山市教育委員会編 2004 『日本海文化を考えるゼミフォーラム「中世岩瀬湊を探る」』
発表資料
パリノサーヴェイ 2004 「打出遺跡自然科学分析」『打出遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 本報告書



第1図 古墳時代～中世における打出遺跡周辺

富山市教育委員会編「日本海文化を考えるゼミフォーラム「中世岩瀬浜を探る」」を基に作成。(下図は国土地理院発行、沿岸土地条件図1981を使用した。)

1. 打出遺跡 2. 江代割遺跡 3. 四方西野割遺跡 4. 四方北窪遺跡 5. 四方荒屋遺跡 6. 四方背戸割遺跡



第2図 富山湾網場の図 (故高瀬保氏蔵 ふるさと富山歴史館より)